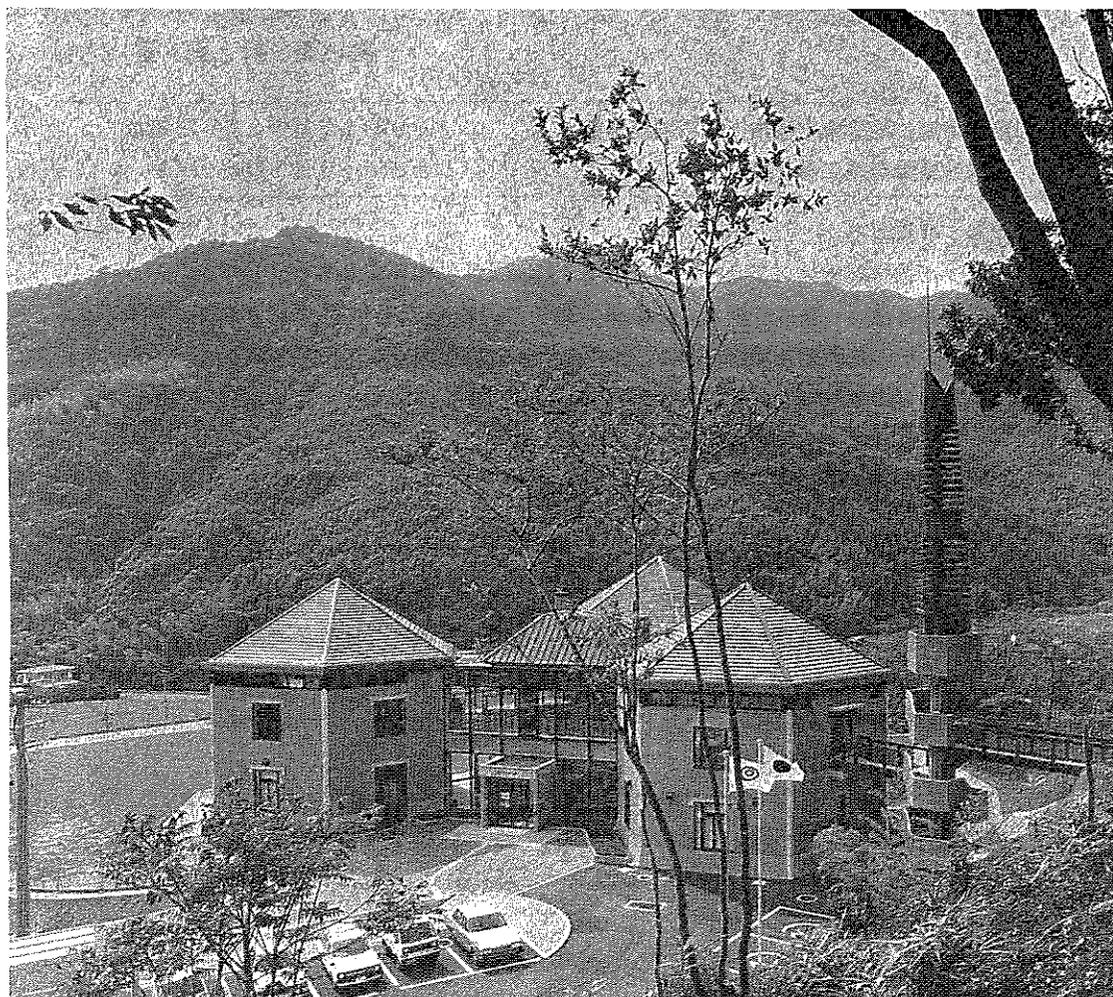


ARPA・K NEWS LETTER

地域計画・建築研究所



田園都市構想モデル事業「山口ふれあい館」(本文3ページ)

アルパック ニュースレター もくじ

- ・昭和59年—今年に完成した建築等施設建設事業—.....2
- ・過疎山村の人口構成が教えてくれるもの.....5
- ・ヨーロッパの都市づくり(その2).....10
- ・旧刊新刊書評
 - 「楽譜の風景」.....12
- ・一知半解
 - 海員(シーメン)と海の玄関整備.....13
- ・まちかど
 - ゲスト・ポケットパーク2題.....14

NO. 8

昭和59年－今年に完成した建築等施設建設事業－

建築計画室

京都駅南口地区第1種市街地再開発事業 施設建築物新築工事「アバンティ」	58年11月甲・乙工事竣工 59年 3月1日オープン
--	-------------------------------

- <委託者> 京都市
 <規模> 鉄骨鉄筋コンクリート造 地下3階 延床面積58,089.09㎡
 <受託業務と特徴> 基本計画（設計監理 京都市計画局市街地再開発課(株)東畑建築事務所）
 昭和45年の基礎調査開始以来13年にわたった京都市で最初の再開発事業
 <施工> 戸田建設(株)・東急建設(株)・(株)藤井組共同企業体

立命館大学尚友館新築工事	59年 1月24日竣工 59年 3月30日オープン
--------------	------------------------------

- <委託者> 学校法人立命館
 <規模> 鉄骨造2階建 建築面積996.73㎡ 延床面積1,674.68㎡
 <受託業務と特徴> 設計監理（企画は立命館財務部施設課） 原谷校地に建つ体育関係合宿所ゼミ室、トレーニングセンター。シンプルで機能性を第一にし、周辺の緑とコントラストのある調和をつくり出す。
 <施工> 大成建設(株)他

八瀬野外保育センターひいらぎの家改修工事	59年5月完成
----------------------	---------

- <委託者> 社団法人京都市保育園連盟
 <規模> 木造平家建
 <受託業務と特徴> 設計監理 当センター開設当初の建物で14年経過し、その後の2期、3期工事で宿泊・管理機能が移り、一方、炊事場、工作場などが手ずまになった為、今回、多目的ホールとして改修。新たに室の中に炉を切り、ファイヤースペースとしても使える。

京都府立福知山高等学校改築工事	59年6月20日竣工
-----------------	------------

- <委託者> 京都府教育委員会
 <規模> 鉄筋コンクリート造 4階建 第1期4,524㎡ 第2期4,367㎡ 第3期3,393㎡ 合計12,084㎡
 <受託業務と特徴> 設計（基本計画及監理 京都府教育委員会管理部施設課）
 <施工> 第1期、第2期 西田・高橋同企業体、第3期 西田・塩見共同企業体

奈良市総合福祉センター新築工事

59年 8月 1日竣工
59年 9月 1日オープン

<委託者> 奈良市

<規模> 鉄筋コンクリート造 地下1階地上2階 延床面積5,500.06㎡

<受託業務と特徴> 基本計画(設計監理 中川建築設計事務所) 心身障害者(児)の通所訓練施設、関係団体の意見、希望のヒアリングを行いながら討論をかわしてすすめる。

隣接する清掃工場から廃熱の供給を受ける。住宅・都市整備公団平城ニュータウンの一角の敷地2万㎡に、引きつづき、体育館、温水プール、菜園、多目的広場を整備する。

<施工> 村本建設他

山口ふれあい館新築工事

59年 8月31日竣工
59年10月 3日開館

<委託者> 山口市

<規模> 鉄筋コンクリート造 地下1階地上2階 延床面積1,298㎡

<受託業務と特徴> 基本計画、設計(監理 山口市建設課) 田園都市構想モデル事業の一環。山口、防府圏域(2市6町)の定住圏構想推進の「創造の森(21世紀の森)」事業の中核施設。敷地は18,000㎡。その他に林間広場、多目的広場などを整備。隣接する国際電々山口衛星通信所から温泉の無償供給を受けて大浴室がある。キノコをイメージする3つの六角型をつなぎ、ユニークなランドマークともなっている。

<施工> 日産建設株

宇治市文化センター

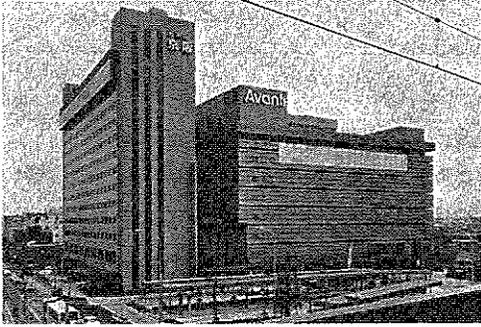
59年10月28日開館

<委託者> 宇治市

<規模> 鉄骨鉄筋コンクリート造 4階建 建築面積9,018㎡ 延床面積11,831㎡

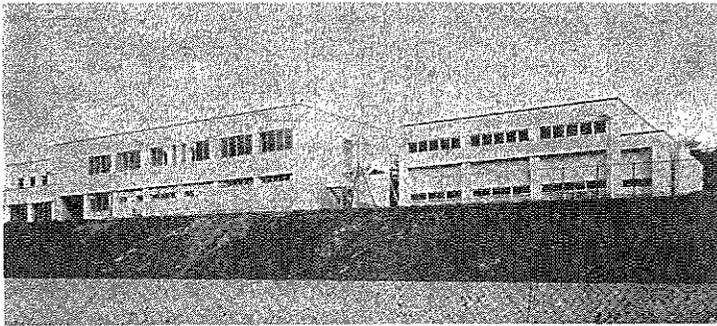
<受託業務と特徴> 基本計画(実施設計監理 株佐藤武夫設計事務所) 文化会館(大ホール1,308席、小ホール406席)、歴史資料館、中央公民館、中央図書館の4つの施設の複合。センター敷地約2.7haの他、同時に3.7haの東山公園を整備し、宇治市街地と山城総合運動公園太陽ヶ丘とを結ぶ文化・スポーツゾーンを形成する。

<施工> 株大林組

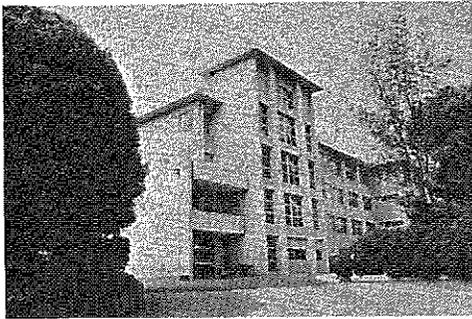


①

- ① 京都駅南口「アバンティ」
- ② 立命館大学尚友館
- ③ 京都府立福知山高等学校
- ④ 奈良市総合福祉センター
- ⑤ 山口ふれあい館 1階展示ホール
- ⑥ 宇治文化センター



②



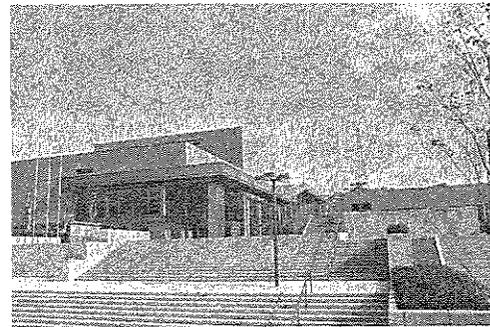
③



④



⑤



⑥

過疎山村の人口構成が教えてくれるもの

藤田武彦

ここ数ヶ月過疎地域（過疎地域振興特別措置法にいう）の山村をいくつかめぐり機会を得ました。主に産業おこしの経過と契機、その後のまちの変化についてインタビューすることが目的でした。いくつかまわるうちに気づいたことがあります。

それは、同じような過疎地域山村でも人口構成上の差が出ているということです。また、それは単に交通条件等の立地条件の変化だけでなく、人口の問題としてベビーブーム世代の地域定着に起因する問題であり、その世代による産業おこしの差に通じていると考えられます。

そうした15～20年前からの産業おこしの事例が今日成果をあげて広く取りあげられている傾向があります。

しかし、現在と15～20年前では地域の

活力のちがいが（人口構成にそのようすが表われていますが）が大きく、今後の地域づくりには、そうした事例も参考にしつつ、新たな企画力と当該地域内だけでなく内外での幅広い産業おこしが求められているように思います。

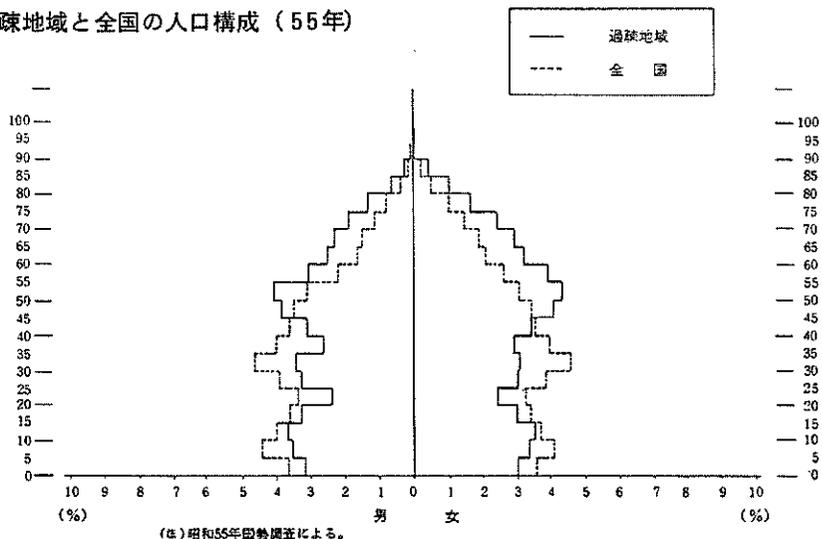
人口構成の不思議さ

まず第1は、人口の構成です。

現在全国の過疎地域の人口構成は図1のようになっています。これをみると、昭和55年では50～54歳に第1ピークがあり、次のピークは45～49歳です。日本全体では御存じのように、ベビーブームの影響で、同じく昭和55年で30～34歳と5～9歳に人口ピークがあります。

このことをふまえて、実際に歩いた次の4

図1 過疎地域と全国の人口構成（55年）



つのみちの人口構成をみると、それぞれに特色があります。

図2は、昭和30年と55年人口を示していますが、55年の人口は、男女別に各5歳階人口の平均値によって2つに色分けしています。

O町は大分県の山村です。人口は昭和55年で4,716人（国勢調査）、人口のピークは男子の場合5～9歳、10～14歳あたりにあり、全体では0～4歳、5～9歳にあります。しかも、25～29歳、30～34歳人口は平均以上います。

T村は、高知県の山村ですが、人口は4,801人、全人口のピークは、45～49歳、10～14歳にあります。しかも、O町同様25～29歳、30～34歳人口は平均以上います。

またM町は、T村と同様、高知県の山村部で人口は6,011人です。しかしT村とはちがいで、人口ピークは全人口で50～54歳、45～49歳にあります。一方、25～29歳、30～34歳

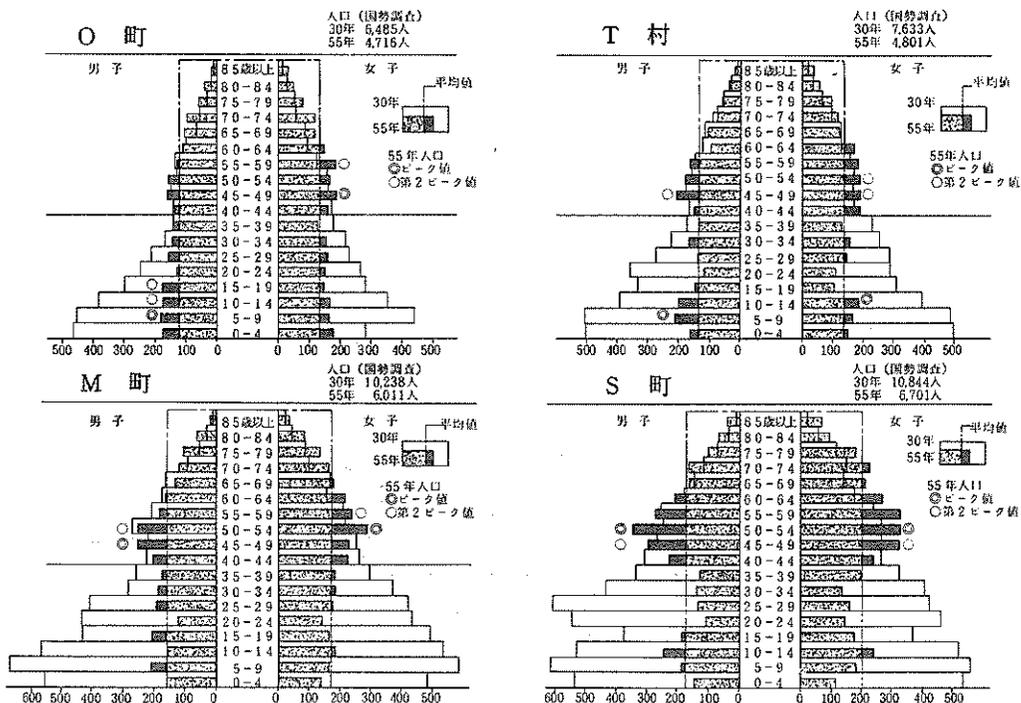
人口は平均以上になっています。これはほぼ全国の過疎地域の人口構成と似かよっています。

最後にS町は和歌山県の山村で、人口は、6,701人です。人口ピークは50～54歳、45～49歳にあります。前の3つの町村とちがって、25～29歳、30～34歳人口は平均以下となっています。

もちろん地域の立地条件はさまざまでありこの人口構成だけでは何ともいえませんが、なぜこういう人口構成の差が出るのか疑問をもちました。

蛇足かもしれませんが、この人口ピークの位置の問題と25～35歳人口の平均以上か以下かという問題をもとに、近畿圏の過疎地域をみると、兵庫県の但馬地域では、M町型が多く、和歌山県の山間部では主にS町型となっていることに気がつきましたが、O町、T

図2 対象過疎山村の人口構成



村型は見かけられませんでした。

過疎山村のベビーブーム

人口はどうなったか

戦後のベビーブームは一応全国では昭和21年～25年生まれをピークとしているといわれています。昭和55年現在では30～34歳にピークがきています。また、その子どもたちを中心とする第2次ベビーブームは、昭和55年で5～9歳をピークとしています。

過疎山村ではベビーブーム人口はどうだったのでしょうか。人口の推移を見るために表1のように男子人口を年齢別に整理してみました。

これによるとやはり、これらの山村の昭和21～25年生まれの人口は一つのピークを示しており、ベビーブーム期を形成しています。しかし、その後の人口の地域定着をみると、地域によって大きな差があることに気がつき

ます。

O町では昭和21～25年生まれの人口は、昭和35年に440人(100%)から昭和50年には137人(31.1%)となっており、T村は同じく461人(100%)から171人(37.1%)になっています。M町では584人(100%)から179人(30.7%)、S町は686人(100%)から159人(23.2%)となっています。つまり、O町、T村は、ベビーブーム期の人口が比較的残り、M町、S町はO町、T村にくらべて人口流出が多かったことがわかります。

この差はどうしてついたのか、次に産業振興の面からそれを考察してみることにします。

産業おこしと人口構成

それぞれとりあげた町村の立地条件と産業振興の経過を簡単にまとめたのが表2です。

これによると、O町は、昭和36年頃から、

表1 男子人口の推移

O 町

	昭和11～ 15年生まれ	昭和16～ 20年生まれ	昭和21～ 25年生まれ	昭和26～ 30年生まれ	昭和31～ 35年生まれ	昭和36年 40年生まれ	昭和41～ 45年生まれ
10～14才	407 (100.0%) 昭和25年	387 (100.0%) 昭和30年	440 (100.0%) 昭和35年	413 (100.0%) 昭和40年	274 (100.0%) 昭和45年	234 (100.0%) 昭和50年	177 (100.0%) 昭和55年
15～19才	300 (73.7%) 昭和30年	221 (57.1%) 昭和35年	254 (57.8%) 昭和40年	212 (51.3%) 昭和45年	158 (57.7%) 昭和50年	177 (75.6%) 昭和55年	
20～24才	208 (51.1%) 昭和35年	154 (39.8%) 昭和40年	141 (32.0%) 昭和45年	118 (28.6%) 昭和50年	130 (47.4%) 昭和55年		
25～29才	207 (50.9%) 昭和40年	154 (39.8%) 昭和45年	137 (31.1%) 昭和50年	155 (37.5%) 昭和55年			
30～34才	156 (38.3%) 昭和45年	139 (35.9%) 昭和50年	146 (33.2%) 昭和55年				
35～39才	135 (33.2%) 昭和50年	140 (36.2%) 昭和55年					
40～44才	136 (33.4%) 昭和55年						

T 村

	昭和11～ 15年生まれ	昭和16～ 20年生まれ	昭和21～ 25年生まれ	昭和26～ 30年生まれ	昭和31～ 35年生まれ	昭和36年 40年生まれ	昭和41～ 45年生まれ
10～14才	405 (100.0%) 昭和25年	389 (100.0%) 昭和30年	461 (100.0%) 昭和35年	425 (100.0%) 昭和40年	351 (100.0%) 昭和45年	269 (100.0%) 昭和50年	193 (100.0%) 昭和55年
15～19才	331 (81.7%) 昭和30年	205 (52.7%) 昭和35年	200 (43.4%) 昭和40年	150 (35.3%) 昭和45年	173 (49.3%) 昭和50年	143 (53.2%) 昭和55年	
20～24才	225 (55.6%) 昭和35年	143 (36.8%) 昭和40年	141 (30.6%) 昭和45年	114 (26.8%) 昭和50年	114 (32.5%) 昭和55年		
25～29才	169 (41.7%) 昭和40年	137 (35.2%) 昭和45年	171 (37.%) 昭和50年	135 (31.8%) 昭和55年			
30～34才	154 (38.0%) 昭和45年	133 (34.2%) 昭和50年	163 (35.4%) 昭和55年				
35～39才	149 (36.8%) 昭和50年	134 (34.4%) 昭和55年					
40～44才	148 (36.5%) 昭和55年						

梅、栗栽培を中心とする所得向上にとりくみ、昭和40年代前半以降からエノキダケを中心とする安定した所得源を形成したようです。またT村は、30年代後半からシイタケ栽培が軌道にのり、40年代には茶栽培も加えて、山村での複合経営にとりこんでいます。

M町は、現在目立った産物はないものの、かって郡域の商業、交通の中心として栄え、そうした立地条件のよさが、今も残っているようです。

S町は、最近立地条件は改善されたものかっは、主要都市部への交通は不便であり、また産物としてもこれまで特に目立ったものもない状況でした。(最近ではさんしょうの栽培が目立っています。)

こうした産業おこしの時期と先の若物の定着のようすを見くらべると、産業おこしによって若者の定着にちがいが出て、現在の人口

構成の差となって現われているようにも考えられます。

つまりO町、T村では、昭和40年代前半頃に所得向上にとりくみ、それに参加した若い人(当時15~19歳)たちはその後村にのこり地域産業の担い手となってきたのだろうと推定されます。

実は現在よくまちづくり事例として紹介されるものには、O町、T村と同じく今から20年前(つまり昭和40年頃)ものが多くあります。成果がそれから10年以上を経て出てきて注目をあつめているのです。その背景にはこうした山村の活力がベビーブーム期人口によって支えられていたことを忘れるわけにはいきません。

また、人口構成のO町型やT村型は、山村部では少し立地条件がよくてもおこるものではなく(兵庫県但馬地域などの方がO町やT

表1 男子人口の推移

M 町

(A)

	昭和11~ 15年生まれ	昭和16~ 20年生まれ	昭和21~ 25年生まれ	昭和26~ 30年生まれ	昭和31~ 35年生まれ	昭和36~ 40年生まれ	昭和41~ 45年生まれ
10~14才	535 (100.0%) 昭和25年	584 (100.0%) 昭和30年	584 (100.0%) 昭和35年	408 (100.0%) 昭和40年	295 (100.0%) 昭和45年	257 (100.0%) 昭和50年	151 (100.0%) 昭和55年
15~19才	432 (80.7%) 昭和30年	343 (60.8%) 昭和35年	254 (43.5%) 昭和40年	225 (55.1%) 昭和45年	181 (61.4%) 昭和50年	203 (79.0%) 昭和55年	
20~24才	283 (52.9%) 昭和35年	154 (27.3%) 昭和40年	160 (27.4%) 昭和45年	132 (32.4%) 昭和50年	121 (41.0%) 昭和55年		
25~29才	216 (40.4%) 昭和40年	192 (34.0%) 昭和45年	179 (30.7%) 昭和50年	193 (47.3%) 昭和55年			
30~34才	218 (40.7%) 昭和45年	185 (32.8%) 昭和50年	186 (31.8%) 昭和55年				
35~39才	218 (40.7%) 昭和50年	179 (31.7%) 昭和55年					
40~44才	202 (37.8%) 昭和55年						

S 町

(A)

	昭和11~ 15年生まれ	昭和16~ 20年生まれ	昭和21~ 25年生まれ	昭和26~ 30年生まれ	昭和31~ 35年生まれ	昭和36~ 40年生まれ	昭和41~ 45年生まれ
10~14才	653 (100.0%) 昭和25年	532 (100.0%) 昭和30年	686 (100.0%) 昭和35年	539 (100.0%) 昭和40年	428 (100.0%) 昭和45年	348 (100.0%) 昭和50年	244 (100.0%) 昭和55年
15~19才	374 (57.3%) 昭和30年	240 (45.1%) 昭和35年	190 (27.7%) 昭和40年	151 (28.0%) 昭和45年	184 (43.0%) 昭和50年	186 (53.4%) 昭和55年	
20~24才	349 (53.4%) 昭和35年	198 (37.2%) 昭和40年	129 (18.8%) 昭和45年	126 (23.4%) 昭和50年	105 (24.5%) 昭和55年		
25~29才	309 (47.3%) 昭和40年	137 (25.8%) 昭和45年	159 (23.2%) 昭和50年	131 (24.3%) 昭和55年			
30~34才	237 (36.3%) 昭和45年	130 (24.4%) 昭和50年	136 (19.8%) 昭和55年				
35~39才	222 (34.0%) 昭和50年	125 (23.5%) 昭和55年					
40~44才	226 (34.6%) 昭和50年						

村より交通条件はよいと思われます。)熱心な産業おこしを基礎としたものであることも推測されます。

今後の人口構成とまちづくり

かつて、昭和30年にはO町は6,485人、T村は7,633人でした。一方M町は昭和55年現在人口が6,011人、S町は6,701人であり、昭和30年のO町、T村とほぼ同じ人口規模になっていますが、人口構成には大きな地域差があらわれています。つまり、O町やT村と同じような産業おこしを行おうにも現在ではその担い手の条件がまるでちがってきているといえます。

最近、過疎地域の人口減少率が低下してきているといわれますが、これは若者の絶対量がへっていることの結果でもあり、このまま推移すると、地域の活力が失なわれていくことは変わらないと考えられます。

また産業おこしは人口構成や所得構造に成果が出るまでに、O町やT村がそうであったように10～15年かかると考えていいでしょう。そうすると当然のことながら新たな産業おこしに早く着手する必要がありますが、その間にも人口減少や、人口の高齢化はすすんでいくと考えなくてはなりません。

その際、山村の人口構成をみると、25歳か

ら34歳の人口が少ない地域でも、昭和60年で10～14歳あたりの子どもにピークがあることに注目してよいでしょう。

現在むらおこしが叫ばれているのもこうした人口の波を意識してのことかもしれませんが、この10年余りが若者を定着させ、地域に活力をとりもどすむらおこしのチャンスだともいえます。

しかし、かつての昭和40年代の若者層とはちがいが、この子ども層を地域づくりの担い手として育てていくには、山村での生活様式の変化や、周辺の動向を読んだこれまでとはちがった企画力と実行力が求められているように思います。また、その地域内だけでなく外からの力をテコにすることも必要となり、そういった意味でも、ここ数年間(現在新過疎法の後期計画づくりの時期ですが)のまちづくり計画は工夫のしどころといえます。また私共まちづくりのコンサルタントにとってもますます確かな企画力が求められてきようかと思えます。

尚、O町は大分県の大山町、T村は高知県の十和村です。その実行力・先見性には感謝し、また勉強させていただきました。ここに付記します。

(ふじたたけひこ 大阪事務所)

表2 立地条件と産業振興の経過

町 村	立 地 条 件	産 業 お こ し
O 町 (大分県)	車で、大分市、福岡市、熊本市へそれぞれ2時間30分程度の山間地、国鉄久大本線	昭和30年代後半より梅、栗栽培、40年代からエノキダケの栽培を開始し、現在エノキダケ年間販売額12億円程度に成長。
T 村 (高知県)	車で、高知市まで2～3時間の山間地 国鉄予土線	昭和38年頃からシイタケ栽培が軌道にのり、40年代に入って茶の生産をはじめた。 林業主体の経営を各種農林産物をくみ合わせた複合経営にかえた。 シイタケは年間販売額5億に育った。
M 町 (高知県)	車で、高知市まで2時間程度、高知県と香川県の県境の山間地	T村と同じく複合経営にとりくんでいるが、主な産業は林業であって、複合経営は十分進んでいない。かつて、交通の拠点で商業集積があるが、現在はその位置づけがうすれている。
S 町 (和歌山県)	車で、和歌山山市から2時間、大阪から3時間であるが、そうした交通条件は近年になって改善された。	昭和50年代になって、さんしょう、木工等の産業が育ってきたが、それまでは林業中心の山間地であった。

ヨーロッパの都市づくり（その2）

—自動車を追放してショッピングモールづくり—

山口 繁雄

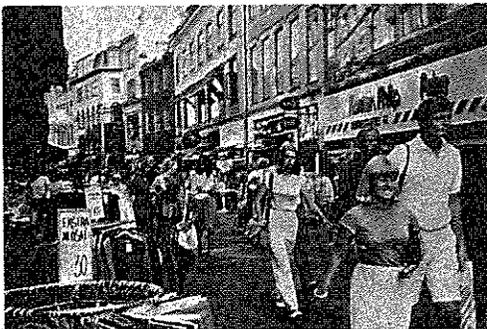
進展するモータリゼーションへの対応をどうするか、これがこれまでの都市づくりの大きな命題の一つでしたが、ヨーロッパの先進都市では、モータリゼーション対応型の都市づくりから方向転換を始めています。

もともとヨーロッパの都市は、石とレンガでつくられた歴史的な都市が多く、モータリゼーションには対応しにくい構造を持っていますが、それでもこれまではモータリゼーションの持つ特性を生かし、問題点への対策を講じながら、それに如何にうまく対応していくかが追求されてきました。しかし、最近では、モータリゼーションへの対応に終始するのではなく、都心部の商店街等からは、むしろ積極的に自動車を排除しようという動きが次第に広がっています。

魅惑のショッピングモール・ストロイエ

デンマークの首都コペンハーゲンのストロイエ通りは、市内随一のショッピングストリートで、市庁舎前からコンゲンスニユトー広場まで約1.2 km 続いています。

かつては自動車も通る普通の商店街でしたが、歩行者天国にすることによって客も増え



コペンハーゲンのストロイエ通り

コペンハーゲン市の都市計画担当官の言葉を借りれば「ヨーロッパでも最も魅力的なモールの一つ」として、大変な賑わいをみせています。

最も、反対者を説得して車をシャットアウトしたこと以外に市のやったことは、ほとんど見当たらないのですが、それでも建物のデザインが素晴らしいことと、適度に道路がうねっているために次々にアイストップが変化すること、ところどころに道路のふくらみや広場があったり、ハッとするほど美しい路地（奥の方には喫茶店のある）があることなどによって、独得の魅力がかもし出されているようです。

我が国でも、ショッピングモールは、それほど珍らしくなくなりましたが、残念ながらこのストロイエには遠く及ばないように思いました。モールというのは、公共スペースだけに力を入れても限界があって、やはり建物のデザインコントロールをやらなければならぬなど実感した次第です。

市では、こうしたモールを、ストロイエを中心に、さらに拡大する方針で、すでに計画も発表していました。この計画が実現すると、都心部のかなりの部分にノーカーゾーンが出現しそうです。

フランクフルトのツァイル大通り

フランクフルトの都心ハウプトバックへから東に伸びるツァイル大通りは、中央駅の駅前通りであるカイザー通りに連なる市街地の東西幹線道路。この幅員約50m、長さ約2 km程もある大通りが、最近全線歩行者専用のシ

ショッピングモールとして再整備されています。

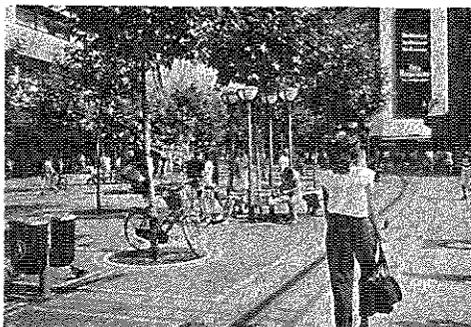
フランクフルトは、西ドイツの古都の一つでもあるので、我が国の都市に例えていえばちょうど京都の河原町通りの都心部が、歩行者専用道として再整備されたようなものです。最も、フランクフルトは古都ではありますが、小ニューヨークともいべき国際的な商都なので、河原町を歩行者天国にするよりは困難な条件があったように思います。

このツァイル大通り、実は地下鉄工事を行った時にオープンカット案が採用されたいのですが、工事後そのフタの上（つまり路上）をどのように利用するかが従前より議論となり、歩行者天国にすることに踏み切ったのだそうです。

しかし、何しろこの都市一番のメインストリートであり、商業者の反対は強く、着工4年前から地元でテントを張り、ビールを持ち込んで、プランの説明や苦情・質問などへの対応を行い、ディスカッションを重ねに重ねてやっと実現にこぎつけたのだそうです。

やはり、都心部の再整備はどこでも大変なようですが、幅員50mのメインストリート全部を歩行者専用道にしてしまったその執念と迫力は、さすがはドイツです。

このショッピングモールのデザインが、また心憎い。広い道路の両側、つまり商店の前は、緊急車用に残して、中央部にかなりの幅



フランクフルトのツァイル大通り

をと、規則的な幾何学模様のペーブを敷き樹木をかなりの密度で規則正しく植えただけのデザインで、わずかに通りの出入口に大きな彫刻と噴水、通りの中程に2~3カ所ガラス張りの“立ち飲み屋、みたいなものが設置されているのみです。単調ではありますが、昼間ここに人々があふれると実に面白い空間になるから不思議です。どうも我国のモールは、策を弄しすぎるのかもしれない。

我が国の都市交通政策はいつ転換するのか

モータリゼーション型都市に変貌を遂げてしまった我が国の都市交通政策は、“うるおいのある都市づくり”を目指していくらか方向転換しつつあるかにみえます。コミュニティ道路やポーンネルフ等の導入は、そのあらわれと見てとれます。また、歩行者専用のショッピングモールづくりも、イセザキ・モールに見られるように、随分積極的に展開されるようになってきています。

しかし、ヨーロッパの諸都市に見られるように、都心ゾーンのかなり広い区域から自動車を排除しようというような大胆な取組は、残念ながら皆無に等しく、前述のコミュニティ道路やポーンネルフは、住宅地内のごく一部の細街路に適用されているにすぎません。

かつては“水都”といわれた大阪では、そのシンボルである川の上に高速道路までつくってモータリゼーションに対応してきましたが、そのみかえりにせめて御堂筋を歩行者専用道路にしてもよいのではないかという気がします。

別にヨーロッパの都市の物真似をする必要もないとは思いますが、いずれにせよ道路ならどこでも自動車が入れるという発想は、もうそろそろ止めなければならないのかもしれない。（やまぐちしげお 大阪事務所）

旧刊新刊書評

「楽譜の風景」

岩城宏之著 岩波新書

糸 乗 貞 喜

指揮者として世界中を飛び歩いている、おそらく1年の3分の1か5分の1しか日本にいないのではないかと思う。ところが、その岩城宏之が、飛行機で飛び帰ったとき。雲の上に頭を出した富士山を見て、「ふーじーはーぼんいーちのやま……」という調べといおうか、台詞といおうかが出てくると書いていた。

ものすごい記号の連続である楽譜をめくりながら、顎を引いたり上げたり、指さしながらウインクを送ったりして多勢の人々を指揮して、クラシックとやらを「ジャンジャンジャン」とやっている人が、「ふーじーは……」というのだから、ずいぶん心が安まる。

そのプロが「楽譜の読み方を習ったことがなかったので、どの曲も平岡さんの放送を覚えてから、まるで暗号を解読するように」何もかも自分でやっていって「暗号解読が成功して、まるで音楽を発見したような気になった。その時々喜びは大きかった。能率は悪かったが……いちいち発見の喜びを味わった方が幸福だったかもしれないと思っている。そのぼくが、現在『楽譜の風景』を蜿蜒と書いているのだ」というのが本書である。

本書の中で最も印象に残ったのは「記憶はフォトコピー」だということにまつわる話。

何十段にも五線がつまっているものを全曲にわたって丸暗記するのを暗譜という（ようだ）。暗記には2種類あると思う。ひとつは論理的にたぐって記憶する方法と、もうひとつは網膜へのフォトコピーをする方法だ。後者についてはわれわれもよく経験している。

難かしい漢字の憶え方などは、なんとなく形で憶えている。フォトコピーそのものだ。五線譜などを論理的に憶えるわけにはいくまいから、フォトコピーという話はよくわかる。

しかしこの著者のすごいのはその後だ。この部分を読んで、もしこの人が音楽などに手を出さずにバイオテクノロジーの分野にでも進んでいたら、日本のバイオテクノロジーはもっとはるかに世界の先端を走っていたのではないかと思った。

ストラヴィンスキーの「春の祭典」を暗譜しようとしたときは三カ月かかった。そのくだりを引用すると「1ページを3分ほど見つめる。全ページこれを繰り返し、最初からまた同じことをやる。必死になって目の中に焼きつける時は、顔が真赤に充血する。……一度覚えてやってしまったら次の時は三週間のにらめっこで済んだ。その次は一週間、次は三日間というように、フォトコピーの時間も短縮された。胸の細胞は、二週間で全部が新しく変わってしまう、ということは何かで読んだことがある。だから最初のうちは二週間に一度コピー作業をやっていたが……脳細胞は結構、事務引き継ぎをやってくれているらしく……」という話になっている。私のタマゲタのは、脳細胞が二週間で入れ変わってしまうと思って二週間に一度コピー作業をやっていたという行いである。この著者には音楽なぞやらずに「脳細胞の事務引き継ぎについて」などといった研究をやってほしかったと思う。

話が横道にそれたが、暗譜がフォトコピーであるがゆえに「頭の中でめくりそこない」そして、ページを飛ばして指揮してしまうというような失敗もする。この話も面白い。とにかく岩城宏之は第一級のエッセイストだ。

(いとりのりさだよし 専務取締役)

一知半解

海員（シーメン）

と海の玄関整備

金井 萬 造

新しい時代に対応して、国際化と国際交流の必要性がわれていますが、外国航路の船舶の入港にともなう海員（シーメン）の活動から海の玄関（港）の整備の重要性を整理します。（データはある港湾の事例からです）

① 国際交流の場

上陸船員の国籍は、邦人が4割、外国人が6割です。外国人のみで見ると、韓国24%、東南アジア諸国が35%（フィリピン、台湾、香港、インドネシア）、欧米諸国15%（ギリシャ、ノルウェー、イギリス、イタリア）と多国籍となっています。

② 常客（何回も来日する）

外国航路の性格から何回も入港するため、4回以上の上陸経験を76%の船員がもっています。

③ 上陸日数は短い

本船の寄港日数が短いことから、上陸日数も、1日未満が48%、1日～3日以内が37%、4日～1週間が3%となっており、3日以内がほとんどです。

④ 上陸後の行動

上陸した船員は、短い時間の使い方として、買物61%、飲食36%、面会27%、通信18%、帰宅15%、娯楽13%、業務上の手続12%が主なものです。買物・飲食の場、面会・通信（情報）の場を求めています。

す。

⑤ 行動半径

上陸船員の行動半径は非常に短かく、港の周辺が68%、近接都市6%です。このことから海の玄関（港湾空間）の整備が望まれています。

⑥ 海員会館

上陸した場合、宿泊場所が1つの大きなポイントとなりますが、海員会館を知っている船員は5割です。利用する船員は8%、他の港湾会館やホテルを利用する船員21%です。

全体で上陸船員の3割の人が宿泊施設を利用し、他の船員は、本船又は帰宅します。

外国の海員会館は、娯楽施設、建物の雰囲気、情報（インフォメーション）、風景や周辺環境がよく、外国人のための施設整備に力を入れ、国際交流の場づくりを進めています。

海員（シーメン）の期待として、家族やグループでの利用のしやすさや建物の施設の充実、安い料金での宿泊を望んでいます。

以上、海員の行動をみてきましたが、最近の傾向として、電気製品や繊維製品の購入、高級船員のホテル宿泊など多様な要請に対応していくことも必要になっているといえます。

国際化、国際交流の重要性がさげばれている現在、何回も訪問する海員に対するサービス施設の整備と合わせて、日本の紹介と宣伝により、海員をとおした地道な国際交流も徐々に効果を発揮することが期待されると思います。調査例でもみたように、海の玄関としての港湾空間と施設整備が求められています。

（かないまんぞう 大阪事務所長）

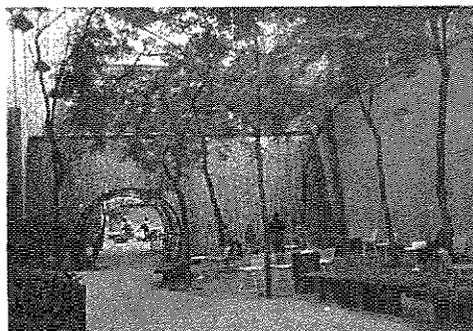
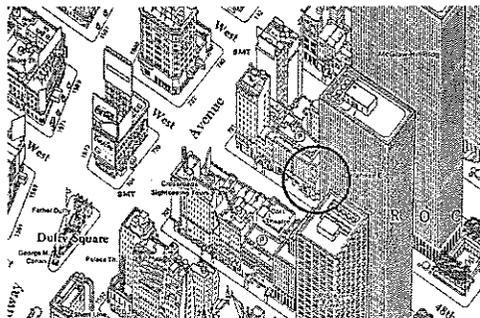
まちかど

ヴェスト・ポケットパーク2題

三輪泰司

① ニューヨークの6番街は、タイム・ライフやエクソンなどの超高層ビルが建ち並んでいる。そのひとつ、出版会社マクグローヒルビルの足元にある例。48番通と49番通の間。丸いトンネルのある壁面に、一パイ滝が流れている。

② 京都、上京区室町通水上の角にある



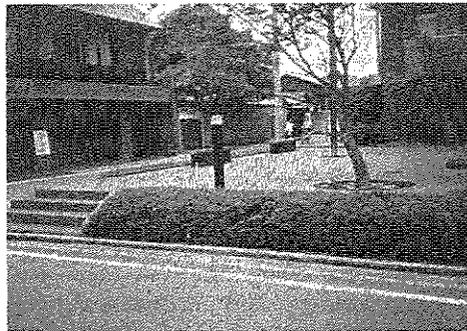
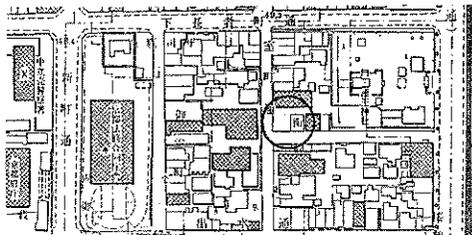
①

例。護王神社の南を西へ入ったところ。この向い側に立石電機が研修所をつくり、その時駐車場になっていたこの角地をポケットパークにしたもの。

同じ系統のレンガタイルで舗装し、北側にある宿泊所ともあわせて、気持のよい街のオアシスを提供している。企業の「グッド・ウィル」というべきか。

「縮み志向」の日本文化からいえば、ヴェスト・ポケットパーク——チョコッキのポケットのような小さな公園——は、もっとつくられ、工夫され、親しまれるようになってよいのではなかろうか。

(みわひろし 代表取締役)



②

ARPA・K (株)地域計画・建築研究所

ARCHITECTS, REGIONAL PLANNERS & ASSOCIATES, KYOTO

- 本社 東京都千代田区千代田1-1-1 TEL (03) 261-1111
- 京都事務所 ㊚600 京都市下京区四條通り高倉西入ル立売西町82 TEL (075) 221-5132(代)
(大和銀行京都ビル8階)
- 大阪事務所 ㊚540 大阪市東区石町1丁目1番地 TEL (06) 942-5732(代)
(天満橋千代田ビル2号館)
- 名古屋事務所 ㊚460 名古屋市中区丸の内3丁目18番30号 TEL (052) 962-1224
(ツボウチビル6階)
- 九州事務所 ㊚810 福岡市博多区中洲中島町3-3 児島ビル3階 TEL (092) 281-2349
- 北海道地域計画 ㊚047 小樽市色内1丁目2番19号 通信浜ビル3階 TEL (0134) 29-1109
建築研究所